

私流 つながりづくりの心構え

愛媛県新居浜市生涯学習センター 所長 関 福生 氏



1 面白い事業をやっている所には、面白いヒトがいる

「もう一度訪ねてみようと思う場所には、もう一度会ってみたいと思える人がいる」ということを言った人がいました。社会教育をやっていると色々なまちを研修などで訪れることが多いのですが、その時に事業の情報を得るだけではなくて、その事業に携わっている人と縁を結ぶことが出来れば、それがあなたの財産になると思います。あなたが面白い事業と思うことは多分ほかの人も面白いと感じているはずで、場合によれば、その人も誰かから学んでその事業を始めたのかもしれない。社会教育の事業は余程のものでない限り、過去からの歴史の上に成り立っているものだと思っています。それを繋いでいるのが私たち社会教育人なのでしょう。面白いヒトは最初とつきにくいヒトかもしれませんが、縁ができれば出し惜しみすることなくあなたに知恵をプレゼントしてくれるはずで、社会教育には、贈与の文化が根付いていると信じています。

2 ネット情報にはマイナスは載らない 本音は面授にある

インターネットで情報検索したら大丈夫という風潮がありますよね。生成AIがあるからとそれに頼ってしまうこともあるかもしれませんが、ネット情報で最初の掴みはできるかもしれませんが、その背景にあるこれまでに乗り越えてきた悩みや確執を知ることはできません。掲載されている内容は良いモノに加工されてしまうことが多いようです。私などは有難いことに、直接訪ねて情報を得ることができた世代です。いつの間にか、先進地の視察などに割く予算は削減され、その機会は失われてしまいました。顔を合わせて対話することが出来る少なくなってきましたが、年に何回かの研究大会のようなものは北海道には残っています。その際にはぜひあなたから話を聞きたい人に声を掛けてみて下さい。そこで自分の疑問を投げかけてみて下さい。きっと、その人も同様の悩みを乗り越えてきた、あるいはその渦中にあるはずで、そこから、きっと本音の交換が始まるはずで。

3 関心事があれば、まずハブ機能を持った人に相談する

直接誰かとつながるのはハードルが高い人もいます。その時は、経験豊かな人やネットワークのハブ機能を持つ機関の担当者に相談してみてください。まさに北海道立生涯学習推進センターはそんな存在だと思います。ハブ機能を持つ人は、色々なハブ機能を持つ人とつながっています。日本中の社会教育人は繋がっていると考えると大丈夫だと思っています。考え方は異なる人も多いので、仲良しかどうかは疑問ですが（笑）、様々な立場の考えを持つ人に結び付けてくれるはずで、そこから後は、あなたの思いを直接語ってください。

4 最新情報にはアンテナを張る。第4期教育振興基本計画や答申に

世の中には新しい情報が溢れています。しかしながら、それが周知されるにはかなり時間がかかります。一昨年、第4期教育振興基本計画策定部会に関わらせていただいたのですが、そこでは自分がこれまで当たり前と思っていた考えを転換させられた学びが沢山ありま

した。人生百年時代をこれまでは高齢者の側からしか見ていなかった自分がいました。個人の職業選択に関わるリカレント教育やリスキリングから距離を置くべきという考え方を固持していた自分がいました。多様な分野の人々が集まり、様々な角度から光を当てることで、自分の考え方の足らざる点を知る情報が、中教審の生涯学習分科会などの答申や議論の整理の中には多くあります。かく云う自分は、若い頃はそんなものをじっくりと読むことはありませんでした。一緒に議論させていただき、はじめてそこに意味があることを知った怠け者です。全文を熟読することは大変ですが、ダイジェスト版が丁寧にまとめられていますので、できれば2年に一度出る報告書を関係職員や公民館運営審議委員のような方々と学び合ってもらえたら良いと考えています。今も、社会教育人材についての議論をしていますが、そこに皆さんの現場の思いがダイレクトに上ってきたらいいなともいつも思っています。そのためにも最新の情報を知ることは大事だと思うのです。

5 つながりの理想形は相互交流 できれば自分一人じゃなく仲間と

新しい活動を始めたいと思った際には、自分達よりも一歩先を進んでいる地域を訪ね、研修させていただきました。私が住んでいる泉川校区のまちづくり協議会をつくろうとした際には、香川県高松市の三谷コミュニティセンターへ20人ほどで押しかけ、彼の地の活動メンバーと本音で議論したことを思い出します。みんなで、讃岐うどんを食べて乗り込んだことを今も仲間と語り合っています。その後、三谷地区とは縁ができ、泉川にやって来て情報交換したり、子ども達を三谷の駅伝大会に送り込み、優勝をさらって顰蹙を買う(笑)こともありましたが…お互いが切磋琢磨する関係が生まれました。その頃の泉川地域では、三谷地区のシステムを参考に、熟議を大事にして、自分達が考え、自分達で実践してまちづくりに取組む熱気が高まっていました。よきライバルの存在はスポーツだけでなく、大人のまちづくりにも大事ですよ。そのことが契機になって、他所の地域と交流する機会を今も大事にしています。ともすれば、井の中の蛙になってしまうのが社会教育やまちづくりかもしれません。全国各地で取り組んでいる面白き事に目を向け、それを通して自分達の活動を客観的に眺めることが、マンネリに陥らないヒントになるのではと思ってきました。

6 良いことは真似て大丈夫 特許を主張する人は別にして

「学びは真似び」ということを私たちの生涯学習大学を立ち上げた時の学長に言われたことを思い出します。前段にも触れましたが、すべてをゼロから考え立ち上げることは余程の天才でない限りはできないと凡才ゆえに思ってきました。企業活動などでは独創性やイノベーションがもてはやされますが、社会教育にとっては、地域のみんが幸せを実感できるかどうか重要で、新規性はあまり必要ないと思っています。良いことは素直に吸収することを受け容れて良いのではないのでしょうか。私どもの生涯学習大学は池田市や箕面市の活動を参考にさせていただきましたし、出前講座は八潮市の事業に教えを乞い、コミュニティスクールは横浜市の東山田コミュニティハウスの竹原和泉さんからコミュニティカレンダーのエクセルの様式を伊熱田抱いて始めたものでした。社会教育人は、ほとんどの人は惜しみなく与えてくださるという感覚を持ってきました。それが「借り」だと思います。「借り」を素直に受けられるチカラが大事だと思いますし、いつかはその恩を誰かに伝えていく「恩送り」をしていきたいというのが自分の思いです。

しかし中には、特許権や著作権を主張する人もいるやもしれませんので、その辺りは、相手との関係性を見極めた上でご対応下さいね。

私流 社会教育職員としての心構え

1 ネットワークの要になるには、自分から働きかけることが大事

「自前主義からの脱却」と「ネットワーク行政の要となる」ことは表裏一体です。ともすれば、予算がついたら自分の事業で、予算がついていないのは他人事という感覚が行政職員にはあることを私も行政職員の一人として反省しきりです。今は、生涯学習大学という市民大学の中に、行政担当課と協働で開催する事業を敢えて組み込んでいます。「SDGsから始める地球環境問題」「今日から始める介護予防」「賢い生活者になるための講座」などは、各担当課がプログラムや講師陣を整え、受講生の募集や講座運営はセンターが担うという体制が当たり前になってきました。その際に感じたのは、言い出しっぺは、社会教育サイドの方が良いということでした。私たちの講座の柱に「SDGsの実現を目指す」を掲げているので、17の開発目標を達成する上では教育をヨコ刺しすることが重要であるという認識のもとに働きかけました。結構、担当課は市民に啓発したいけれどもその手段を持ち合わせていないので躊躇していることが多々あります。こちら側から一声かけることで、マッチングでき、それが市民の学びの充実、幸せの実現に繋がればなによりですよね。結果的に、行政内での社会教育の存在意義が高まり、その後の新しい展開が生まれるはずです。

2 あなたは全国の仲間と繋がっている 六次の隔たり

「六次の隔たり」という言葉を聞いたことがありますか。ネットワークの世界では、一人に30人（人数は諸説ありますが）のつながりがあると仮定すれば、30の6乗で73億になり、世界のすべての人がつながっているという架空？の説ですが、それと同じようなつながりの縁を社会教育仲間の間ではよく聞きます。社会教育の世界は狭いのかもかもしれませんが、結構引力があるようで、誰かの名前を出すとその人を介して話が弾むということは何度も体験してきました。職場ではともすれば孤立したり、孤独感を味わうこともあるかもしれませんが、全国にはきっとあなたと同じような思いの人がいるはずです。今、社会教育士という仕組みをつくって、これまでの社会教育士とは違う立ち位置で社会教育の人財を拡大しています。そこには、様々な分野の人が集まっています。まさに、違う視点で社会教育に光をあてることができる時代が来たことを感じています。そんな人たちが交流できるプラットフォームを創ろうという試行も始まっています。あなたは一人ではありませんよ。

3 自分の中にある先入観、固定観念を疑ってみる 高齢者とICT

長年社会教育に関わってくるとどうしても頭が固くなり、過去の体験に基づいた判断に頼ってしまいがちです。学習棄却（アンラーン）ということが言われて久しいのですが、中々できずに仕事に取組んできました。新型コロナは多くの困難をもたらしましたが、ICTの推進についてはまさに起爆剤になりました。私たちのセンターもWiFiが整備され、大型モニターも新型コロナの補助金で整備することが出来ました。その際、Zoomの活用を促進するための講座を開催しました。予想では、高齢者はやって来ないだろうと見込んでいたのですが、いざふたを開けてみると90代から60代までの高年者で定員を遥かに上回りました。その際、どうして受講したのかを尋ねてみると、私は耳が遠くなったのでみんなと一緒に受講しても聞こえない、運転免許返納したのでタクシーで来ているから家で受講したいという意見がかなりありました。また、ある80代の女性は子どもがドイツに居るので、「ひ

孫たちとZoomだったら会話ができるじゃろ」と楽しそうに語ってくれました。これまで、高齢者即デジタル弱者という先入観を抱いていたのが一気に打ち消された瞬間でした。その後も、高齢者向けにスマホ講座や動画制作の講座を行いました。予想以上の参加者が集まっています。今回のコロナのような環境変化が一気に社会を変えるだけでなく、従来からの固定観念やいつの間にか変化してしまった住民意識を疑ってみることが、新しい活動につながることもあるのではないかと考えています。それが、社会の流れに抗うことに取り組んでみるべきだと語った意味です。

4 まずは会話から始めて、徐々に信頼関係をつくっていく

講義の中でも語りましたが、皆さんの職場には住民の方が多くやって来ることと思います。その人たちと言葉を交わすことはありますか。最初の一声はあなたから発することが多いでしょうか？それとも相手からでしょうか？相手からの問いに対して、どう言葉を返すかで会話が広がっていくか、閉じられてしまうかは決まる気がします。紋切り型の答えではなく、そこから新しい話が生まれる投げ返しが大事だと思うのです。私は、入庁して最初の3年間の公民館生活で世間話ばかりやっていたことを今になってありがたく感じています。無駄な会話の中に、新しい活動のきっかけが沢山ありました。また、人は自分が言い出したことには、最後まで責任をもって付き合ってくれることを学びました。語り合い、その結果何かを実現することが出来れば、その方との信頼関係が蓄積されていきますよね。その信頼が、後々活かされてくることが沢山あったということは今になって思い出します。実際にやっている時には分からないことの意味を、後々知るといのは恥ずかしく、残念なこともあります。それが社会教育なのかもしれません。

5 我利我利ではなく、利他の精神をもつ 忘己利他➡自利利他

私が公民館で仕事していた時代は明治生まれの気骨を持った人がまだ沢山いました。自分の事より公を大事にする滅私奉公の精神もありました。平成になった頃から、社会教育が生涯学習と呼ばれるようになり、個人の要望が社会の要請よりも前面に出るようになりました。また、社会も、新自由主義の時代になり、自己責任が幅を利かすようになってしまいました。我利我利亡者とまでは言いませんが、先ずは自分の権利を主張する人が多くなり、その結果そんな人への防御本能が働き、必要以上のことはやらない、言わない社会教育になってしまった気がします。格差社会と言われる中で、取り残されてしまう人も増えてしまいました。その際に大事になってくるのが「利他」のころではないかと思っています。公民館には元々そんな人たちをほっておけないという精神が根差していました。明治の人たちはさりげなく困った人たちに手を差し伸べていたことを思い出します。利他を考えると、最澄の天台宗の教えでは「忘己利他」自分を置いておいて他者を利すると説くそうです。それに対して、弘法大師空海は「自利利他」と説きます。自分も他者も共に利する生き方を説いています。宗教の教えは理解していませんが、自己犠牲ではなく、自己承認や自己実現が利他につながることをやっていく「幸民館」になれば良いと思うのです。

6 みんな違ってみんないい？ 多数決で決める？

「みんな違ってみんないい」というフレーズは金子みすゞの詩で周知されています。他者の生き方や個性を認め合うことは本当に大切な事です。でもいつの間にかイメージが一人歩きして、何をやっても勝手にしょという社会に変わってしまった気がしてなりません。確かに、自由というものは人間にとって大事なのですが、相対主義ですべてを片付けてしまうとコミュニティは壊れてしまう気がしてなりません。特に感じるのは、自治会やPTAなどの組織や団体がいつの間にか衰退していくことへの危惧です。入っていても何のメリットもないし、辞めても特にデメリットはないから脱会するという話を何度も聞きましたし、PTAって義務ですかと語る人も増えました。自分にとっての損得だけで判断すること、さらに言えば今の状態だけで判断してしまうことは危うい気がしてなりません。災害に見舞われた時にコミュニティの大切さが語られます。子ども達の格差や不登校などもそのまま放置すべきではないと考えます。そのようなことについてみんなが集まって語り合える場が今の時代求められていると思うのです。多分考え方はさまざまでしょう。そんな場を無視する人も多いかもしれませんよね。それでも敢えてやってみる価値はあると思います。私たちの生涯学習大学でも、意図的に対話重視の講座や障がい者との共生をテーマにした事業に取り組んできましたが、最初は少人数しか集まりませんでした。しかし、回を重ねると段々と受講生が増加してきました。みんなの考えは多数決ではなく、活動の積み重ねの中で決まっていくものじゃないでしょうか。共通善を探り、つくっていくのが社会教育かもしれません。

7 カネは後からついてくる まずはやってみよう

予算がついて初めて仕事だと考える人もいるかもしれません。首長部局の仕事はともすればそんなイメージを持ってしまいます。行政としての意思決定なしには政策は打てないという理論も成り立つのかもしれません。社会教育は基本、住民主導だと思っています。そこに暮らす人が自らの発案でやってみようとするモノがあれば、まずはやってみようというスタンスで良いと考えています。社会教育法23条1-1の営利活動の禁止の捉え方も本来はこのスタンスでいいはずです。もしやってしまって誰かに文句言われたら厄介なので、最初から関わらないというのがやり勝ちな対応ですが、最終的には善いモノは残るのではないかと考えます。個人にとって都合の良いものではなく、みんなにとって「善」だと思えるものが継続していくのではないのでしょうか。私も地域で花づくりに取り組んできました。小学校のPTA副会長の時に始めたので30年経ちましたが、いつの間にか地域のみんなと一緒に年に2回、人口と同じ1万本ほどの花を地域の各所に飾ることが出来るようになりました。最初は、学校農園に種が落ちて芽吹いたサルビアを通学路に30個ほどのプランターで並べていたのが、いつの間にかタネから育て、仲間が増え、自分の自治会のごみステーションや道路の花壇に植えてくれるようになりました。お金は、活動が広がるにつれて後付けで付いてきました。10年、20年、30年という節目ごとに活動のステージが変化してきたことも今になって感じます。まずはやらない理由を並べ立てるのではなく、やってみて地道に取組み、仲間が増えていけば拡大していく、そんなやり方が大事なのかと思うのです。

8 社会教育の職員は“公私混合”が理想かもしれない

社会教育の活動は公私の境界がなかなか引けないということを公民館時代からずっと思ってきた。そもそも、公民館活動に関わってくれる住民はボランティアなスタンスである。そこに主事である私が給料を貰って関わっていることに何とも言えない後ろめたさを感じていたことを思い出す。特に、時間外手当をもらって仕事する際にはそれを感じた。住民の中には、あからさまにそのことを口にする人もいた。管理職になってほっとしたことも覚えている。「公私混同」は自分に都合がよいように我田引水で物事を処理することだと思うが、「公私混合」はその線引きをせずに気持ちの上で仕事を楽しむことにつながると思っている。今は受講生と共に学び、学びたいことを一緒に考え、一緒に楽しんでいる。また、自分のプライベートの時間は、地域の活動やNPOの活動の中で自分に出来ることに取り組んでいる。それらは個々に別のものではなく、色々な面で結び付いているのである。仕事と私事が上手く融合していくことが社会教育にとっては理想なのかもしれないと思うのだ。楽しむこと遊ぶことが社会教育の目指すところかと思うようになってきた。誰かに叱られるかもしれないが…